

# 保育の体験と思索

——子どもの世界の探究（三十六）——

津 守 真

このシリーズで、私は、大学の附属幼稚園の三歳児から五歳児

までの三年間、ひとつのクラスで同じ子どもたちとつきあうこと

ができた、その体験を中心に、子どもの世界と保育について考察してきた。今回記すのは、そのクラスに私が行った最後の日のこと

とであり、卒園式前の普通の保育としてもほとんど最終の日と云ってもよいと思う。子ども自身には、最終の日という意識はほと

んどないだろうが、いろいろのところ、この三年間の幼稚園の生活を完結させるような姿を私に見せてくれている。私のまわりで起ったこの日の子どもの姿を、一日の流れの順序に従って考察

する。

五歳児三学期 最終の日——三月十四日

N——親しさの交流のスボット

朝、登園してきた子どもがまだ少ないころ庭に出ると、男児Nが遠くから走ってきて、私にとびつく。私はNを抱き上げ、腕を伸ばして高く支えてやると、にこにこ笑い、地面におろすとすぐ

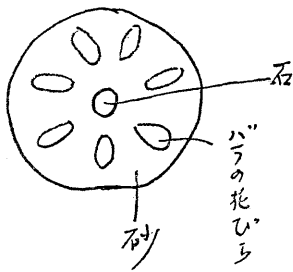
に走り去って砂場にゆく。

Nは元気のよい男の子であり、三歳児のときに、後に記すMくんと共に、私との間に思い切った出会いがあり、それが契機となって、私が幼稚園にゆくたびに親しさを示してくれる。それは三歳の一学期の砂場で、いつも乱棒にとびかかってくるMくん、Nくんときき合いきれなかった私は、その日に、一緒に裸足になり、泥をかけ合って遊ぼうと自分の気持ちをきめた。それ以来、親しきの心がお互いに交流するようになったのである。(このことは、第七十六巻三号に記してある。)この日も、Nは私を見るとすぐにとんできて、親しみの心を寄せた。私もそれを嬉しく思った。しかし一瞬の後には走り去り、自分の遊びに向っていった。おとなと子どもとの両者が同時に親しさを共感する時間である。それは突然そこに挿入された点のように見えるが、私共の生活の中には、そのようなスポットがいくつもあって、それが支えになって、それぞれの独自の行為が安定して進行するのではないかと思う。また、しばしば、このような親しきの交流のスポットは、新たな行為を生み出す源泉となる。いま、Nには、明らかに自分の世界があり、この日の私とのふれ合いは、その中に点在する他人との親しきの交流のスポットである。

## 花びらのデザイン

私は砂場に歩いてゆくと、砂場の縁にある道具入れの中に、丸い皿に砂をいれて小石とバラの花びらを配したものが置いてあるのに気がつく。女兒が三人来て、「あ、きのうのつづきがあった」と云う。女の子たちは砂場にはいる。Nがそこに来て、女兒がキヤーと逃げるのを追いかける。男の子と女の子と追いかけて遊ぶ楽しさが双方にある。

図1に示した丸い皿の中の小石とバラの花びらのデザインは、調和のとれた完結形である。形として作り易いデザインと考える



▶ 図 1

こともできるが、形を作る主体の側にも対応した調和のある生活感覚があるのだからと私は想像する。このデザインの皿が、この女兒たちの手で、昨日つくられて、人目につかない砂場の道具入れの中に置かれていた過程を考えると、この子どもたちにとって、これは大切なものであり、こ

の子たちの生活の内容と関連づけて考えてよいと思う。

その女の子たちと男児とは、しばらくの間、追いかけ合うことを楽しむが、Nが二人をつかまえるとそれで終り、女の子たちは、いつものように、砂場で溝をほり、山をつくりはじめる。

(このころ、女児が砂場をやるのが目についていた。) Nも他のところにくゆ。両方の子どもたちにとって、これも、自分の世界の中に点在する親しさの交流のスポットのひとつである。

#### D——社会のひろがりの中で自分を探る

男児Dが部屋から出てきてぶらぶらしていたが、砂場のはしで、山をつくりはじめる。山が次第に高くなると、四、五人の男児と一緒にやりはじめる。みんな歌をうたいながら、シャベルをふり上げて、砂を盛りあげる。数人で一緒に、砂をシャベルですくって山にするのが楽しいという感じである。

Dは三、四歳のころには、砂の中に自動車を埋めたり、石を砂の中にいれ、上から砂をかけてかくしたりしていた子どもで、長い間、十分に遊びまわることができず、友だちとのつきあひもうまくできなかった。このシリーズの中でも、何度か記したことがある。幼稚園の後半になって、部屋の中で飛行機や電車を紙で作ることが面白くなり、五歳になってからは、汗をかいて走りまわる

姿をしばしば見かけるようになった。この日は砂場で物を埋めるのではなく、力をこめて砂を盛り上げ、高い山を作る。前に考察したように、砂の中に埋める物を自分自身の象徴と見るならば、Dはもはや自分自身を人の目からかくす必要はなくなつて、むしろ、だれの目にも聳え立って大きく見える山を、力をこめて作っているように思われる。しかも、一人でなく、数人の男の子たちと一緒に歌をうたいながら作業をすることを楽しんでいる。ひとりで砂の中にいろいろな物を埋めていたときには、自分の心の中でいろいろの可能性を探り、試みて、それを楽しんでいたのであると思うが、他人の目の前にそれを持ち出すことには、不安や恐れやためらいがあったのだと思う。その後、室内で、自分の手で、幾重にもはめこみになった小さな飛行機を、一日中かけて作ったり、それを友だちからもすごいを作ったと云われたり、かなりの期間を室内で過して、戸外にあらわれることが少なかつた。いまや、Dは、社会のひろがりの中で、友だちと楽しみながら、精神的に形あるものを作ろうとしている。この過程を思うとき、途中の日々がそれぞれの意味をもっていて、その積み重ねの上に、この日の山づくりがあることを認識することができる。自分の心の内奥で、一人の作業として探究する期間があるからこそ、現実の社会の場で建設的な試みをするができるようになる

っている。前の段階があるから、後の段階がある。けれども、後の段階のために、前の段階があるのではない。それぞれの時に、その時を充実して過すことによって、その時が意味あるものとなるのであって、いずれかが他方に従属するのではないであろう。いまふりかえっても、あの砂の中に物を埋めて、その上を叩いて、何が入っているか？ と云っていたころの、頼りなげな、しかしそこに動いていた繊細な心の世界は、それなりに豊かな世界であったと思う。そして、いま、大きな砂山を協同で作っているときにも、この子どもの繊細な心は、目にはつきりとは見えないところで動いているのだと思う。この日のDの伸びやかに楽しんでいる砂場の遊びは、また、幼稚園の終りの時期にふさわしい。

このことは、Dについてだけでなく、他の子どもたちのそれぞれの場面についても同様である。

### As——自立への助け手

砂場のへりで、女兒Asは、さっきから、ひとりで、容器に小石を並べたり、型ぬきをしている。園庭をへだてた太鼓橋の下で、女兒が数人ままごとをしている。Asは砂場のへりで型ぬきをしたプリンを、その太鼓橋の下に、だまって運ぶ。私も砂場のへりに腰をおろして、プリンの型ぬきをしていた。Asは何度も運んでい

るので、私が作ったプリンを渡したら、「イヤ」と云って受けとらない。私はいくつもプリンを作って並べておくと、しばらくして、Asは私の作ったプリンを持ってゆく。私はそのとき、何か親子の間のやりとりのような感じがした。

このとき、私はAsとの間で親子関係のような気がしたのは何だったのだろうか。普通、このような場面で、私が砂のご馳走を子どもに手渡すと、相手は大がい受け取ってくれる。受け取ってもらえないときは、その子とまだ十分に親しくなっていないときのように思う。Asの場合は、すでに私と親しい間柄である。かなり以前のことであるが、食事をたべるのがのろいAsは、お弁当が最後にひとりだけになってしまった。私はAsがお弁当を食べ終るまで、その傍で待っていた。弁当箱を仕舞うと、Asは親しげに私の膝にもたれ、それから私の手をひいて、一緒に庭に出た。それ以来、Asは私を見ると親しい顔つきを見せて近寄ってくるこがづづいた。

この日、私はAsに砂のご馳走を差し出したのに、Asはそれを受けとらなかつた。それなのに、私が作って並べておいたご馳走を、だまって持っていったのである。最初の場面では、ままごとをしている友だちのところにご馳走を作って運ぶAsは、独立した

一人前の人として、自力で事を成してゆくのであって、保護者がそこに介入する場所ではない。断然、独立を主張する。しかし、他方、保護者であるおとなの物は、潜在的に自分の物であって、いつでも利用できる。私は、自力で自分の世界を開いてゆこうとする女の子に、余計な助けの手を差し出したのではなかったかと思つた。その反面、だまつて、私の作つた物を持っていつてくれたことを嬉しく思つた。

## M——出合いの完結

男児Tは、砂場の外で皆を見ていたが、「こまつたなあ、Kちゃんもぼくと遊びたいっていうし、Nくんもぼくと遊びたいっていうし」と云つて、結局、Kちゃんたちのやつている木工場にゆく。木工場では、K、Y、Ms、Mらの男児たちが、木を切つたり、釘を打ちつたりしている。

隣の組の五歳児の子どもたちが、ブーメランをしていたが、木にひっかかり、とれないで困っている。私が棒でとろうとする。と、木工場にいたMくんがとんでくる。「かたぐるまして」というので、肩車をしてやると、すぐに取る。私は、今日、Mくんの肩車をしてやれてよかつたと思う。

Mくんは、このシリーズの中で、しばしば登場した、このクラスで最も元気のよい男児である。肩車をしてやったことは何度もある。この子どもは、高い所にある物を、遠くから望み見ているのではなく、何としてでも自分の手で取ろうとする。それだけの体力も、運動力も、エネルギーも持っている。この日も私の肩にのると、高い木の上まで体を伸ばしてブーメランを取り、得意気である。

先にNくんのところで記したように、三歳の一学期の砂場で、Mくん、Nくんと出会つたことが、私をこのクラスにひきずりこんでくれたとも云える。私共はしばしば、子どもと一緒のところにおいても、子どもの世界とかけ離れたところに立っていることもある。自分も上衣を脱ぎ、裸になって、共に泥にまみれることを迫られるとき、そのときの体験は、抗しがたい生命力をもつた現実であり、同時に、それだけ心の深みに達する体験であつて、必然的に、内的な想像力を呼び起してくれる。保育の体験は、こうした現実と想像とが表裏をなしたものであることを、明瞭に認識する契機となつたのは、あの三歳の時のMくんとの出合いであつたと思う。もちろん、時定のできごとが極立つた輪郭をもつて意識に上ることがあるにしても、他の場面での、他の子どもとの数多くの出合いの連続の中で意味をもつのであることは云うまでも

ないが。

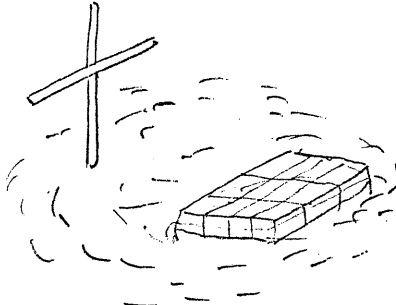
この日、Mくんが私の肩の上で高い木に手を伸ばしたことは、予期しなかったことであるが、このクラスの最終の日の保育を完結させる体験のように思えて、私にとって嬉しくもあり、不思議なことであった。

## 十字架と墓

その後、私は砂場にはいり、たいやきの型をいじったり、容器をいじったりして時を過していた。みんなよく遊んでいて、私は

また手持ちぶさたであった。

そこに男児Kzが来た。手に木の十字架を持っている。それを砂に立て、その前に私が型ぬきをして作ったプリンとたいやきを置き、籠をかぶせる。「おはか」という(図2)。だれのお墓？ とたずねても何も答えないで去る。



▼ 図 2

こんなことが最終の日に起

るのはどうしてなのか、これも全く不思議である。あたかも、子どもたちは、最終の日であることを意識して行動しているかのようである。しかし、子どもが、意図してこのように行動しているとは考えにくい。偶然にこうした遊びがあらわれたとしか云えない。

私が作ったものを、籠で蔽い、内側にかくして、その前に十字架を立て、お墓というのは、私とのつきあいに終止符を打つことを宣言しているように思える。Kzとは、何度も一緒に遊び、心を通わせた。それも否応なしにこの日で終りになる。子どもは自分からそれを葬むって、次の生活に出發しようとしているかのようである。幼児とのつきあいは、その時には心の奥まで気持を通わせて遊んだように思っても、淡々としていてあとを引かない。

## ma——身体の形の再現

女兒maが滑り台の下でひっくりかえり、ちょっと泣きそうになる。私が傍にゆくと、「こういう風にひっくりかえったの」と、ひっくりかえったときの身体の形を再現してみせる。

自分の身体の運動を頭の中に思い描いて、それを身体の形として表出することは、この子どもの特色であるように思える。この

三年間の中でもいろいろある。白雪姫のおばあさんになってと云って、その中でみせたいろいろのしぐさ、他の子どもがやる通りに手足を動かしてみたり、また、夢見るような目で何かをしているときには、現実の友人関係は眼中にないように見えたり、突然泣き出したり、これでなければいやだと云い張るときなど、わがままで幼稚すぎるように思えることもあった。いま、この子どもが運動感覚や身体の形を頭に思い描いているのを見るとき、この子どもが固執するほどに云い張ったり、泣いたりしたときにも、その頭の中には有形無形のさまざまな空想があったのだろうと察することができる。この子どもが頭の中に思い描く仕方には、独特の面白さがある。その内的世界の価値が認められてきたので、この子どもはそれなりに柔軟に友だちと交わりながら、自分の世界を表出するようになっていく。この後通過しなければならぬ学校の生活の中で、その独自の世界はどのようにして持ちこたえられるであろうか。

この日、一日、私はそれぞれが自分達でよく遊ぶのを感じて見た。

この日の遊びは、この日だけを見ても面白いが、この三年間のことだけを考えても、過去の場面のそれぞれと関連がある。その過去が現在だったときに、その時に応じて子どもが充実した生活ができるように保育がなされてきたそのことと関連がある。その過去の一日がなかったなら、今日の一日もなかったであろう。今日友だちと楽しんでひとつのことをしている子どもたちは、過去においては、同じ場所で共存するのに大変な困難のあった子どもたちである。そのときに、保育者が、その時の現在に身を浸して、それぞれの子どもたちの生活の充実を考えながら保育してきたことが今日を作っている。そのときに育てられたものが今日の中にふくまれている。このことが、この三年間のこのシリーズによって、いくらかでも明らかにできたならば幸いである。

この幼児たちにとっては、この三年間のことは、大きくなってからの記憶にはほとんど残らないであろう。しかし、それが、それぞれの個人の意識以前の歴史を形成していることは明らかである。五歳児の三学期の終りまで見てきて、ここまでの期間に育てられるものがいかに大きいかをあらためて感じる。おとなの生活の中での精神的課題が、素朴な原始的な形で、この幼児期にすべて含まれていると云ってもよいくらいである。

この子どもたちの生活は、ここで一つの区切りを迎えた。ま

た、幼児期という人生の基本的な時期を乗りこえて、次の時期へと向う。そこでは幼児期が消去されるのではなく、幼児期に獲得された基本のほとんど無意識の堆積の上に、新たに抬頭してくる能力をもって、積み上げられてゆくものである。この後の生活も、広がりゆく社会生活の中で、新たな課題に直面し、常に變動しながら進みゆくであろう。その後も、一日一日が充実した生活となるように、保育者としての助け手を必要とするし、ある時期がくると、彼ら自身が広い意味での保育者として他人の成長の助け手となってゆくであろう。

おとなとして、三年間の子どもの成長を見てきた私共は、この三年目の最終の時期の子どもの行動が、少なくともこの三年間の過去に支えられてあり、また、未知の、しかしある程度の自信のある未来の展望の中に成り立っていることを認識することは容易である。いま、目前に見るべきことは、過去も未来も含み、精神世界をもった人間の現象である。このシリーズで私がつた方法は、現象のこのような認識の上に立っている。子どもとかかわる保育の体験によってとらえた子どものは、自分自身の、生きた世界の総体と、他である子どもの、生きた世界の総体との境界にあらわれる現象である。その現象のこまかな観察を通して、背後にある世界を知るにはその事實的側面に忠実であることが根

本であり、思いがけないところにつながりを発見する連想や、感によって茫漠ととらえたことの中に意味を見出す想像など、複数の思考法を要する。このような保育現象の考察は、保育実践の前提ともなつてゆくものである。幼児の保育を通して、私共は人間を学ぶのであり、そのような意味で、保育学は人間学である。

幼稚園の三歳児が五歳児になるまでの生活を月ごとに追うことを骨子として、その同じ時期に、知恵おくれの子どもはどのようなか、また、家庭での生活はどうであるかを付け加えながら、いずれも、私自身が子どもと交わる保育の中で得られた体験の資料をもとにして、幼児の世界を考えてきた。ここで考察してきたことは、ほとんど無限にひろがる子ども世界のほんの一部にすぎないことはいうまでもない。また、幼い子どもの保育を通して、人が得てゆく知恵にも限りはない。

いま、幼稚園の五歳児の最終の日の考察を終えた。保育の体験と思索のシリーズは、これで終りとする。

(おわり)